

戦国時代甲斐国の流行病史

——「勝山記」「塩山向嶽禅庵小年代記」「王代記」「甲陽日記」の
4年代記による111年間の検討——

吉岡 正和

吉岡医院

受付：令和2年3月27日／受理：令和2年9月1日

要旨：甲斐国には4つの年代記が残されている。流行性疾患について検討したところ、戦国時代を主体とする111年間で、多くの犠牲者を伴う、25年間分30疾患の記録が得られた。天然痘5回、天然痘+麻疹1回の流行があった。漢字の「麻疹」は1513年に初めて使用とされているが、これは誤りで、後日の書き直しによると判定出来た。1513年には梅毒と思われる疾患が記録され、国内梅毒流入の二番目に古い記録と思われた。更に、確証は得られていないが、1476年と1503年には、狂犬病感染を疑わせるイヌとキツネの記録が見られた。

キーワード：甲斐国流行病史、戦国時代、麻疹、梅毒、狂犬病

甲斐国には「勝山記」（「妙法寺記」）、「塩山向嶽禅庵小年代記」、「王代記」、「甲陽日記」（「高白齋記」）の4つの、戦国時代を主体とした年代記が残されており、甲斐国史、武田氏研究に用いられている。それとは別に、庶民生活に密着した天候不順や風水害、作物不作、飢饉、餓死、更に地震といったことと共に、多くの犠牲をもたらした流行性疾患の記録もあり、これを拾い上げて甲斐国流行病史として検討したところ、戦国時代を主体とする111年間の記録が得られたので報告する。

材料と方法

「勝山記」（「妙法寺記」）、「塩山向嶽禅庵小年代記」、「王代記」、「甲陽日記」（「高白齋記」）の4年代記について簡単に触れ、流行性疾患の記録を抽出し得た期間を記す。

「勝山記」は富士御室浅間神社（勝山村、現南都留郡河口湖町）に伝えられる年代記で、元来無題であるが「勝山記」の名称が定着し、文正元年（1466）からのいわば本編ともいべき年々書き込まれた年代記と、それ以前の長録六年（1462）

までの仏教史年表の色合いの強い記録に分けられるという¹⁾。それで文正元年～永禄六年（1466～1563）の98年間の記録を検索対象とした。一方「妙法寺記」は文正元年～永禄四年（1466～1561）の96年間の記録で、文化年間に国学者小山田与清が都留郡吉田の神官田辺重斐の所持する無題のもの（上で言う「勝山記」そのものではないようである）を書写し、これを基に文政九年（1826）に「妙法寺記」という題で刊行されたものである^{1,2)}。「勝山記」と比較すると脱落行や誤写があるので、「勝山記」の方が原本に近いと判断される^{1,2)}が、逆に「妙法寺記」記載の方が正確な部位もあって、両者に共通の祖本があったと考えられている²⁾。それで「勝山記」³⁻⁷⁾と共に「妙法寺記」^{7,8)}も検索対象とし、特に断らない限りは「勝山記」の記述に含めている。

「塩山向嶽禅庵小年代記」（以下「小年代記」と略）^{9,10)}は、臨済宗向嶽寺（甲州市）に伝わる、永和二年～明和六年（1376～1769）にわたる約400年間の記録で、残されているのは写本と考えられている¹⁾。歴代住持の記録が中心であるが、流行性

疾患に関する記録がある、文明十八年～享禄三年(1486-1530)の45年間を検討対象期間とした。

「王代記」^{11,12)}は、大井俣窪八幡宮(山梨市)の別当普賢寺(廃寺)旧蔵で、内容は三分され、1.は第百代までの天皇の記録である「王代記」と嘉慶三年～明応九年(1328-1500)までの主に東国や甲斐国に関する記録、2.「年代記A」:神武天皇～永徳二年(1098)までの記録、3.「年代記B」:継体十六年～正保二年(522-1645)までの一年毎の記録という¹⁾。写真版で見ると¹²⁾、1.2.は文章を書き連ねているのに対し、3.は3つの見開きページに縦線を引いて20行ずつ計60の枠を作ってそれぞれを60の干支に当てはめ、更に横線で上中下と三分し、出来た180の枳(3回の干支180年分)内に1年分の記事を書き込む形をとっている。検索対象期間は、流行性疾患関連の記録がある古代や甲斐国以外のことを除いた宝徳二年～大永七年(1450-1527)の78年間とした。

「甲陽日記」(「高白齋記」の名前でも知られている)^{13,14)}は明応七年～天文二十年(1498-1553)の56年間の記録で、特に天文十年以降は武田家の動向のみに限定されており、武田家の用務日誌を基にした可能性が述べられている¹⁾。流行性疾患の記録は天文三年～天文九年(1534-1540)に限られていた。

4年代記については、山梨県史資料編の翻刻^{3,9,11,13)}により、記す場合は読点や誤字の当て字の訂正等はそのままとし、写真版^{4,8,10,12)}や他の翻刻も参考にした。また飢饉、餓死、風水害といった記録も適宜拾い上げた。

結 果

4時代記の書かれた地域は、「勝山記」は富士岳麓地方の河口湖周辺(現南都留郡)、「小年代記」と「王代記」は甲府盆地の北東側(現甲州市塩山と山梨市)である。

表1に4年代記の流行性疾患の記述をまとめたが、量と内容が豊富な「勝山記」の記録に「妙法寺記」の記述を〔 〕内に加えて年代ごとに記し、「小年代記」「王代記」「甲陽日記」の記録は別欄に年次別に追加する形を取った。更に、流行性疾

患の記録が見られた宝徳二年～永禄三年(1450-1560)の全国的な流行病史を、「日本醫學史」¹⁵⁾と「日本疾病史」¹⁶⁾より、その参照とした文書と共に年代ごとに加えている。

流行性疾患の記録された期間、年数、疾患数は、「勝山記」が文明九年～永徳三年(1477-1560)の84年間で19年分21疾患になり、「小年代記」は文明十八年～享禄三年(1486-1530)の45年間で4年分4疾患(病風・疫癘・癘)、何れも施餓鬼実施の理由として挙げられ、「王代記」は宝徳二年～大永七年(1450-1527)の78年間で3年分、疫疾・瘡瘡・疫の3疾患で、「甲陽日記」は天文三年～天文九年(1534-1540)の7年間の2年分で疫病・疫の2疾患であった。結局、宝徳二年(「王代記」)～永禄三年(「勝山記」)(1450-1560)の111年間に及び、重複を除いて25年間分、30疾患が記録されていた(表1)。

同年流行は「勝山記」で永正十年(1513)咳病とタウモ、天文六年(1537)疫病とモの2疾患が記録され、4年代記間では文明十八年(1486)「勝山記」疫病と「小年代記」疫、享禄三年(1530)「勝山記」ナヤム事と「小年代記」癘、天文三年(1535)「勝山記」疫病と「甲陽日記」大疫が記録されている。各疾患については、「モ」「瘡瘡」は天然痘、「イナスリ」(稲磨)は麻疹と想定可能であるが、疫・疫癘等については病状の記載は全体に乏しい(表2)。

「勝山記」と「妙法寺記」の記述の差異は、疾病流行に関する限り、病名の漢字表記への変更が主体で、6回登場する「モ」は大永三年(1523)のみ〔痘〕で他は〔瘡〕に、永正八年(1511)「コウヒ」は〔口痺〕、永正十年(1513)「タウモ」の項の「大ナルカサ」は〔大成瘡〕と変更されている。一方、永正十年(1513)の「此季咳病世間ニハヤル事大半ニ過タリ」では、「妙法寺記」で咳病が〔麻疹〕と書き改められている。

病気の流行や死亡に関しては、千死一生、人民死事無限、言悟道断(「妙法寺記」では言語道断に変更)とか決まり文句が記されている場合が多いが、天文十九年(1550)のみは「此ノ春中、少童共モヲヤミ候て皆々死事不及言説、下吉田バカ

表1 「勝山記」を中心とした4年代記の流行病記録

年代	西暦	「勝山記」の記録内容（〔 〕は「妙法寺記」の記述）	「塩山向嶽禪庵小年代記（小年代記）」「王代記」「甲陽日記」の記録内容	疫病流行史——「日本醫學史」(7)と「日本疫病史」(8)による：【 】内はその判断
宝徳二年	1450		大疫病起テ人民死ス「王代記」	大疫病「南方紀伝」
宝徳三年	1451			冬十一月疾疫行「文正年代記」
享徳元年	1452			瘡瘡流行、隲。年「文正年代記」
享徳二年	1453			京都小兒イモヤミして多死「文正年代記」
寛正元年	1460			飢饉、疫病餓死病死人「文正年代記」
寛正二年	1461			飢饉疫病「大乗院旧記」「武家年代記」「歴代皇記」「長録寛正記」
文明三年	1471			赤疹はやり人多く死す「筒井家記」
文明八年	1476	犬ニハカニ石木又ハ人カミツキ自滅スル事不知数	小兒瘡瘡多死「王代記」	疫病流行「*4」
文明九年	1477	少童モ〔瘡〕ヲヤム事大半ニコエタリ、生ル者ハ千死一生		瘡「妙法寺記」
文明十三年	1481	此年疫病天下ニ流行ス、人病ミ死事無限		疫病流行「妙法寺記」
文明十四年	1482			疫病大流行「*4」
文明十五年	1483	疫病多クハヤルナリ		疫病大流行「妙法寺記」
文明十六年	1484			瘡瘡並瘡（ハシカ）「多聞院日記」
文明十八年	1486	疫病ハヤリ千死一生也	四月十八日維持天下疫、由是就于山門頭大施餓鬼大衆同心營之「小年代記」	疫症流行「妙法寺記」
文明十九年*1	1487	疫病ニテ人多死事大半ニ過タリ		疫病流行「妙法寺記」
長享二年	1488	申年疫病ハヤリ人民死事無限		流布所勞、人民惱乱「親長記」
長享三年*2 延徳元年	1489	疫病ハヤル、人民死ス		疫疾流行「後太平記」「分類年代記」・疫「妙法寺記」 赤斑瘡「拾芥記」「親長記」【麻疹】
明応元年	1494		六月國中病風起回、依之山門頭大施餓鬼執行「小年代記」	疫病、五畿並諸国、餓死「親長記」
明応八年	1499			諸国疫病流行「*4」
明応九年	1500			天下疫病「和長記」
文亀三年*3	1503	キツネ〔狐〕人ニ成テ人ノ家ニ来リ〔人ノ家来ト成〕、又キツネ人ニクイツイツクナリ〔喰付也〕		
永正二年	1505		維持天下多疫病人民死、由是就于山門頭大施餓鬼「小年代記」	
永正三年	1506			麻疹流行「麻疹養生伝」

永正八年	1511	浮世ニコウヒ(口瘡)ハヤリ人民死事無限、然間 彼ノコウヒ(口瘡)ノ鳥ヲツクリ送候、一日ヤミ候テ頓死至候	口瘡「妙法寺記」【喉痺】
永正九年	1512		人民多有瘡・謂 _二 之唐瘡、琉球瘡 _一 「月海録」
永正十年	1513	此季喉病(麻疹)世間ニハヤル事夫半ニ過タリ 此季天下ニタウモト云ニ大ナルカサ(云大成瘡)出テ、平癒スル事良久、 其形状(譬)ハ癩人ノ如シ、食ハ違者ノ百(ナル人ノ)ニスマムナリ	麻疹「妙法寺記」 タウモ「妙法寺記」
大永三年	1523	此年少童モ(痘)ヲヤム、亦ハイナスリヲヤム候、大概ハツルハ也	痘・イナスリ「妙法寺記」
大永七年	1527		此春夏大疫起ル「王代記」
享禄三年	1530	七月八月ノ両月諸国ノ諸神ヲカシマユ人々送り申事無限 人々ノナヤム事数ヲシラス、タイカイ死ルナリ	自六月初孟蘭盆前後天下多瘧、貴 賤上下人民牛馬鹿畜共死却矣「小 年代記」
享禄四年	1531	此年少童モノ(痘ヲ)ヤム事無限、千死一生也	痘「妙法寺記」
天文三年	1534	次ニ疫病ハヤリ候テ皆々ヤミ申候	疫行「年代記首書」・疫病「妙法寺記」【身代観 世音縁起】
天文四年	1535	次難義ナル咳病ハヤリ申候	ハンカ「後奈良院宸記」・咳病「妙法寺記」【流 行性感冒】
天文五年	1536	殊更疫病ハヤリ申候	疫病「妙法寺記」
天文六年	1537	疫病ハヤリ申候、殊更言語断絶死至候テ 此年童子共モ(痘)ヲ致候事無限、	痘「妙法寺記」・疫疾流行「若狭守護代年表」
天文九年	1540		疫疾「長享年後畿内兵乱記」・大疫癘「簡井家記」
天文十五年	1546		麻疹流行「本朝年鑑」
天文十九年	1550	此ノ春中、少童共モ(痘)ヲヤミ候テ皆々死ル事不及言説、 下吉田バカリニテ五十八人斗リ死ニ申候	痘「妙法寺記」
天文二十三年	1554	人々ナヤミ申候無限、ハラヲ類イ(腹)候テ、タイカイ(大概)死去申候	
弘治二年	1556		小兒吐逆「難州府志」【百日咳・流行性感冒】
永禄三年	1560	去程二己未ノ年(永禄二年)疫病ハヤリ、悉ク人多ク死事無限候 觀而西之年(永禄四年)迄三年疫病ハヤリ、村郷アキ申候事無限候	(永禄四年までの三年間)疫疾流行「妙法寺記」

*1: 文明十九年丁未、七月改元して長享元年(1457)。

*2: 長享三年己酉、八月改元して延徳元年(1489)。

*3: 「勝山記」では文龜二年癸亥とするが、干支より文龜三年と訂正変更。

*4: 文献明記なし。

表2 4年代記に記録された各流行病の検討

疾患名	流行の特徴や程度	予後	病名推測・備考	年代	西暦	年代記	全国的流行 (7, 8)
疱瘡	小児	多死	天然痘	文明八年	1476	王代記	疫病
モ〔疱〕	(罹患は大半越え), 少童	千死一生	天然痘, 前年から?	文明九年	1477	勝山記	
モ〔疱〕	(罹患は) 無限, 少童	千死一生	天然痘	享禄四年	1531	勝山記	
モ〔疱〕	(罹患は) 無限, 童子共	(記載なし)	天然痘	天文六年	1537	勝山記	
モ〔疱〕	春中(流行), 少童共	皆々死ル事	天然痘	天文十九年	1550	勝山記	
モ〔痘〕 亦ハイナスリ	少童	(大概死亡)	天然痘+麻疹であらう	大永三年	1523	勝山記	
タウモ	天下, 大ナルカサ, (カサの) 形状ハ 癩人ノ如シ	(平癒良好, 食思良好)	梅毒	永正十年	1513	勝山記	永正九年, 「月海録」 に「唐瘡, 琉球瘡」 の記述あり
コウヒ〔口痺〕	(鳥流し実施)	死事無限		永正八年	1511	勝山記	喉痺, 扁桃腺炎とする(7)
ナヤム事	(7-8月, 鹿島送り 実施)	(大概死亡)		享禄三年	1530	勝山記	
ナヤミ	(腹部症状)	(大概死亡)	消化器感染症?	天文二十三年	1554	勝山記	
咳病〔麻疹〕	(罹患は) 大半ニ 過タリ	(記載なし)	〔麻疹〕は誤認誤 記	永正十年	1513	勝山記	麻疹流行「妙法寺 記」: 誤認
咳病	難義ナル	皆々死去	麻疹か?	天文四年	1535	勝山記	麻疹
大疫病		人民死ス		宝徳二年	1450	王代記	大疫癘
疫病	天下ニ流行ス	死事無限		文明十三年	1481	勝山記	
疫病	多クハヤル			文明十五年	1483	勝山記	前年の文明十六年 (1484) 麻疹流行
疫病		千死一生	下記と同一疾患 か?	文明十八年	1486	勝山記	
疫病	(4月に施餓鬼)	千死一生	施餓鬼実施			小年代記	
疫病		(大半以上死 亡)		文明十九年*1	1487	勝山記	
疫病		死事無限		長享二年	1488	勝山記	流布所劣, 人民悩乱
疫病		人民死ス	麻疹か?	長享三年*2	1489	勝山記	麻疹
病風	六月, 國中	(記載なし)	施餓鬼実施	明応元年	1494	小年代記	疫病
疫癘	天下	人民死	施餓鬼実施	永正二年	1505	小年代記	
大疫	春夏	(記載なし)	春夏流行	大永七年	1527	王代記	
多癘	(6月~7月)	(人民死)	夏流行	享禄三年	1530	小年代記	
疫病	皆々ヤミ申候	(記載なし)		天文三年	1534	勝山記	疫行・疫病
疫病	春ヨリ夏迄	人多死	春夏流行			甲陽日記	
疫病		(記載なし)		天文五年	1536	勝山記	前年の天文四年 (1531) に麻疹流行
疫病		(餓死あり)	餓死+疫病死	天文六年	1537	勝山記	疫疾
大疫	春夏	人多死	春夏流行	天文九年	1540	甲陽日記	疫疾・大疫癘
疫病	(永禄二三四年流 行)	死ス事無限	3年流行, 住民減 少	永禄三年	1560	勝山記	

*1: 文明十九年丁未, 七月改元して長享元年(1457).

*2: 長享三年己酉, 八月改元して延徳元年(1489).

リニテ五十人斗り死二申候」と具体的な数字を上げている。他に永正八年(1511)コウヒでは1日病んで死亡とか、享禄三年(1530)ナヤム事、天文二十三年(1554)ナヤミでは大概死亡と記されている。

更に、永禄三年(1560)の項には「去程ニ己未ノ年(永禄二年)疫病ハヤリ……惣而酉之年(永禄四年)迄三年疫病ハヤリ、村郷アキ申候事無限候」と、3年連続の疫病流行による人口減少を記している。

一方、永正十年(1513)には「此季天下ニタウモト云二大ナルカサ〔大成瘡〕出テ、平癒スル事良久、其形□〔譬〕ハ癩人ノ如シ、食ハ達者ノ百〔ナル人ノ様〕ニス、ムナリ」とあり、カサの性状と予後が良好なことを記している。ここで形□は、形双⁵⁾、形解⁶⁾、形状⁷⁾等と翻刻され、「妙法寺記」では〔形譬^{7,8)}〕とされているが、意味内容から以下では形状としている。

流行病以外では、餓死が「勝山記」に12年分、「小年代記」に2年分、「甲陽日記」に「小年代記」と同年の1年分、合わせて14年分記録されている。「勝山記」では風水害による人の被害2年分が記述され、その内1件は富士岳麓地方独特の雪代水(富士山の積雪が一度に溶けて洪水を引き起こしたもの)の記録であった。また明応七年(1498)には4年代記とも大地震発生と被害を記録している。

表1でまとめた「日本醫學史」¹⁵⁾「日本疾病史」¹⁶⁾では、対象とした宝徳二年～永禄三年(1450-1560)の111年間中32年間に疾病流行の記事がある。その根拠となる文書はのべ50に及ぶが、明記なしの3冊を除き、「妙法寺記」引用が17回(約3分の1強)と突出して多く、4回引用1文書、2回引用1文書の実質27文書であった。また、「妙法寺記」を唯一の流行の根拠としているのは11年分、12疾患(永正十年(1513)は2疾患)であった。

考 察

「勝山記」(と「妙法寺記」)、「塩山向嶽禅庵小年代記」(「小年代記」と略)、「王代記」,「甲陽日

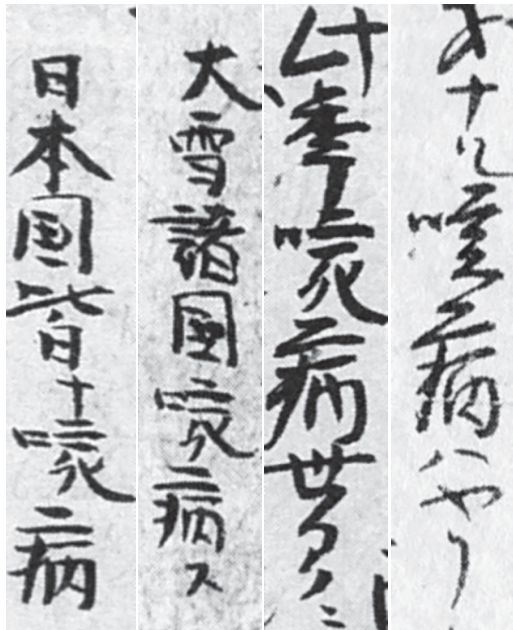
記」の流行病の記録をまとめた(表1)が、これらは宝徳二年～永禄三年(1450-1560)の111年間に及び、大略戦国時代に一致する年代であった。これらの記録者は、「甲陽日記」を除き、僧侶によるとの思われ、病状の記載はあまりなく、病気の想定も困難を伴う場合が多い。

類似の表記の流行性疾患を並べ直し、検討した(表2)。

1. 麻疹流行について

麻疹は古くは癩子瘡、赤斑瘡、赤疱瘡、赤モガサ、稲目瘡などと呼ばれ¹⁵⁾、稲麦の芒(のぎ)が喉をこするようでありいらすることからハシカと呼ばれるようになり、同じ意味で稲磨(イナスリ)という名称も起ったといわれる^{15,16)}。

富士川は永正十年(1513)の「妙法寺記」の記述に依って、麻疹流行と合わせて「麻疹」という表記の初出としている^{15,16)}が、これは「妙法寺記」の誤読誤記を基にした誤認である。「勝山記」の永正十年(1513)の記述では、「此季咳病世間ニハヤル事大半ニ過タリ」とあり、「妙法寺記」では「咳病」の部分〔麻疹〕と変更してしまっている。「勝山記」において「咳病」の記載は4ヶ所(内2ヶ所は検索対象期間外)に見られ(図)、天文四年(1535)以外は読解が難しい字であるが麻と見誤ることはないと思われ、「咳病」の病の字も疹の字と明らかに異なっており、捏造とまで言わないにしても、誤読誤記は間違いのないところと思われる。このために、「麻疹」という文字の最も早い使用例とされてしまい^{15,16)}、今日でもそう思われている¹⁷⁾。この「妙法寺記」の元になる文書を筆写した小山田与清(天明三年～弘化四年)(1783-1847)は国学者で後に約5万冊の蔵書を有して好学の士に開放し、今日の図書館のような役目を果たしていたとされる¹⁸⁾が、文化年間に筆写というとその30歳頃のことであろうか。「勝山記」を読みやすくするために原文を変更したと思われるが、病名等でコウヒを〔口痺〕、モを〔疱〕〔痘〕、カサを〔瘡〕と変更しても、必ずしも読みやすくもなく、却って誤解を生むような恣意的な変更になっていると感じられる。「妙法



1. 貞治四年 (1365) 2. 康暦元年 (1379) 3. 永正十年 (1513) 4. 天文四年 (1535)

図 「勝山記」における咳病の文字表示

寺記」は「勝山記」最後の記録の永禄六年（1563）より約250年経った時期の書写であり、両者を照らし合わせずに、「妙法寺記」のみでものを語ることは止めるべきと考える。

「勝山記」「妙法寺記」の言葉使いの細かい検討が行われているが^{7,19)}、咳病と麻疹の違いについては触れられていないのも不思議である。

4年代記による麻疹の記録は、「勝山記」での大永三年（1523）の「此年少童モヲヤム、亦ハイナスリヲヤム候」のみであるが、天然痘と麻疹の鑑別が出来なかったというより、しばしば両者の同時期流行があったということ¹⁵⁾、夾麻疹（天然痘と麻疹を共に患う）という謂いもあったことから^{20,21)}も、同時期両者の流行があったのであろう。

111年間の全国的な麻疹流行は、上記通り誤認による永正十年（1513）以外は、文明三年（1471）、文明十六年（1484）、長享三年（1489）、永正三年（1506）、天文四年（1535）、天文十五年（1546）の6回^{15,16)}で、4年代記には一致した記録はない。既に橋本伯壽が文化年間に、麻疹は外国から流入して全国に一斉に、それも西から東に流行し、未

感染者がいなくなると共に終息すると喝破している^{20,21)}ように、6回の全国的な流行が甲斐国に一回も波及しなかったとは考えにくく、湿疹で鑑別可能といっても、麻疹自体の呼吸器症状、二次的な呼吸器疾患併発等で、表2での咳病、疫病、病風、疫癘という病名で記録されている可能性がある。全国的な麻疹流行年、前記のように西から東に広がるという原則に準じて翌年、更に流行前年まで広げて、前後3年間と4年代記の記録を照らし合わせると、全国的な麻疹流行と同年の長享三年（延徳元年）（1489）「勝山記」（「勝山記」では長享二年とするが干支から長享三年と訂正）の「疫病ハヤル、人民死ス」、天文四年（1535）「勝山記」「難義ナル咳病ハヤリ候て皆ナ死去申候」などは麻疹であった可能性が高く、天文四年（1535）翌年の天文五年（1536）「勝山記」「殊更疫病ハヤリ申候 皆ナ死去申候」は前年から年を越えて流行の可能性があり、文明十六年（1484）の流行前年天明十五年（1483）「勝山記」の「疫病多クハヤルナリ」、永正三年（1506）前年の永正二年（1505）「小年代記」「天下多疫癘人民死」、天文四年（1535）前年の天文三年（1534）「勝山記」「疫病ハヤリ候テ皆々ヤミ申候」と「甲陽日記」「春ヨリ夏迄疫病人多死」などにも多少の可能性はあろう。

ここで繰り返しになるが、永正十年（1513）「妙法寺記」の〔麻疹〕との記載は、当年前後には全国流行の記録もなく、麻疹の流行自体を否定出来ると考えている。

2. 天然痘（痘瘡）について

天然痘はモガサ、イモヤミ、モ、疱瘡等と呼ばれ¹⁵⁾、特有の湿疹と経過、致命率が高いことが広く知られていたようであり、流行を繰り返すうちに大人より小児の疾患と認識されつつあったのであろう。

天然痘罹患後の予後は、一年のみ記載がないが、多死、千死一生（千人中一人のみ生存とすると致死率99.9%）、皆々死ル事、大概死亡とあって、却って分かり難い。天文十九年には「下吉田バカリニテ五十人斗リ死ニ申候」と具体的数字が

挙げられている。人口規模の直接比較は困難ながら、これから156年後の宝永三年(1706)下吉田村明細帳²³⁾では高872石余、軒数264、人数1750とあり、大きな村であったと思われるが、約50名の少童の死亡を目の当たりにしての「余ノ事ニ書付申候」との記述は、統計的なことは兎も角も衝撃の経験だったのであろう。

3. 「タウモ」

永正十年(1513)「咳病〔麻疹〕」記載の同年に、「此季天下ニタウモト云ニ大ナルカサ〔大成瘡〕出テ、平癒スル事良久、其形状〔譬〕ハ癩人ノ如シ、食ハ達者ノ百〔ナル人ノ様〕ニスコムナリ」との記述がある。富士川は、「妙法寺記」のようにカサを〔瘡〕とし、タウはトウ(唐)なので「タウモ」は唐瘡となり、唐瘡とか琉球瘡と呼ばれた梅毒だとしている^{15,16,24)}が、この論理は「妙法寺記」で「勝山記」の「カサ」を〔瘡〕に恣意的に変更したのであろうことから、そのままでは受け入れがたい。しかしながら、その前年、永正九年(1512)の竹田秀慶「月海録」に「永正九年、壬申、人民多有瘡、似_レ浸淫瘡、是膿疱、鰐花瘡之類、稀所_レ見也、治_レ之以_レ侵淫瘡之藥、云々、謂_レ之唐瘡、琉球瘡」という内容が引用されており^{15,23)}、東京帝国大学皮膚科教授であった土肥慶蔵も梅毒とする考えに賛成して、「月海録」の「人民多有瘡」や「妙法寺記」に「大ナル瘡出テ」から、猛烈な流行を察するに足りるとし、「浸淫瘡・膿疱・鰐花瘡」とか「癩人ノ如シ」という記述より、二期及び三期皮膚梅毒としている²⁵⁾ことから、梅毒流行の記録と思われる。つまりは「勝山記」は日本に流入した梅毒の、現状では二番目に古い記録ということになる。

また、土肥(1866-1931)が同世代の富士川(1865-1940)から直接聞いたこととして、富士川が浅田宗伯所蔵書の中から写本としての「月海録」を見だし、橋本伯壽の書き入れがあったこと、その後は行方不明と記している²⁵⁾。

橋本伯壽はどこかの時点で「月海録」を読んだのであろうが、「断毒論」にはその記述はなく、天文年間に大友宗麟が外国との交易を始め、永禄

十二年(1569)に外国船が長崎に入港するようになった頃、長崎経由で梅毒が伝えられたのではないかと述べる一方で、永禄、天正頃には唐瘡と称していたとも述べている^{21,22)}。彼は蘭書の知識から、梅毒がアメリカからスペインにもたらされた事も知っており、中国には明の弘治(1487-1505)末年頃に伝えられたとしている^{21,22)}から、永正九~十年(1512-1513)頃我が国に出現したとしても、矛盾はないと言えよう。また、「妙法寺記」刊行は文政九年(1826)で橋本伯壽(?-文政五年)(?-1822)没後だが、彼が「勝山記」の記述を知る機会があったか否かを考えてみた。「勝山記」は門外不出だが、文化初め頃の甲府勤番支配主導の甲斐国志編纂事業で、当時は名称なしだが現在でいう「勝山記」そのものが提出されている。甲斐国志のいわば民間出身の編集委員内藤清右衛門は、「断毒論」の唯一の跋文を花溪大機名で記しており、その中で橋本流の避痘を実施してうまく行ったことを述べ²⁶⁾、「断毒論」には内藤清右衛門の娘が伯壽の医学の師匠の息子あるいは孫に当るとされる医家の高室昌韞に嫁いでおり、第二子妊娠中に流行した麻疹から逃れる方法を橋本伯壽が指導して免れ得たことが記されている^{20,21)}ように交流があったと思われ、都留郡の主任を務めたのは別人で、「断毒論」にも記述はないのであるが、情報を得ていた可能性も多少はあろう。

4. 「コウヒ〔口痺〕」

「コウヒ」は喉痺とされ扁桃腺炎と考えられており¹⁵⁾、文化二年の医家の日記に「喉痺下痢」という記載例²⁷⁾もあり、口と書かれることもあるようだが喉のほうが相応しいであろう。一方、この「コウヒ」は、コウヒの鳥を作って鳥送りをしたということからかなりの流行があったと思われ、「人民死事無限」とか「一日ヤミ候テ頓死至候」とか述べられていて、急激な死の転機を取っており、単なる扁桃腺炎ではないと思われる。流行性で急死も多いとなると、急性喉頭蓋炎や偽膜性喉頭炎が想定可能ではあるが、勿論確定は困難である。

5. 「ナヤム事、ナヤミ、咳病、疫病、病風、疫癘」

他の挙げられた病名については、咳病は咳が主体の病気と推測できるが、他のものは死者を伴う流行性疾患とは言えても、その本態は推測するのみである。

「ナヤム事」、「ナヤミ」は同じ疾患か否かも不明であるが、罹患率が高く、大概死亡と子後も悪かったようである。天文二十三年（1554）「ナヤミ」では「ハラ〔腹〕ヲ煩イ候て」ということから、腹痛や下痢が出現する感染性の消化器疾患であろうか。

また15年間に15の疫・疫病・癘・疫癘との記述があるが、上述の通りに麻疹流行が含まれている可能性がある。これらの内、文明十八年（1486）には「勝山記」（疫病）と「小年代記」（疫）が、天文三年（1534）には「勝山記」と「甲陽日記」が共に疫病流行を記述していて、甲斐国全体への広がりがうかがわれる。

「勝山記」永禄三年（1560）の項の「疫病」では、永禄二・三・四年のことが合わせて記されているので、永禄四年以降の記述と思われるが、「村郷アキ申候事無限候」と、多数の死者による住民や世帯の減少といった社会的影響も記されている。

6. イヌ・キツネの狂犬病？

「勝山記」には、文明八年（1476）「犬ニハカニ石木又ハ人カミツキ自滅スル事不知数」、文亀三年（1503）（文亀二年の項にあるが、干支より文亀三年に訂正）「キツネ〔狐〕人ニ成テ〔人ノ家来ト成〕人ノ家ニ来リ、又キツネ〔狐〕、人ニクイツクナリ〔喰付也〕」という奇妙な出来事が記録されている。イヌが急に木石やヒトを咬み、斃れたこと、キツネがヒトに寄って来るといった異常行動を取り、ヒトを咬んだことから、イヌやキツネの狂犬病発症が疑われる。ヒトが狂犬病罹患動物に咬まれた場合、狂犬病発症は15%程度、発病までに2週間～1・2年かかり、発症してしまうとほぼ致命的と言われる²⁸⁻³⁰。ヒトの狂犬病発症らしき記録はなく、潜伏期の長さから咬傷との関連も理解され難く、狂犬病自体を認識出来なかった可能性もあろう。狂犬病の日本での流行

は、この時点から約250年後の享保十七年（1732）長崎に始まり、宝暦十一年（1761）に下北半島まで到達したのが嚙矢とされている^{30,31}。

享保十七年（1732）以前での我が国での狂犬病発症は、大陸からの犬の到来による感染の可能性は指摘されても、実際には疑われる報告はないと言われている³¹。一方、狂犬、狂狗という言葉はあり、養老元年（717）の養老律令で狂犬（「タブレヌ」³²「タブレタル」犬との訓付き）³³、空華老師日用工夫略集巻2³⁴（臨済宗僧義堂周信の日記）応安八年（1375）五月十九日の条で狂狗（人を咬み傷付けるので、賞品を出して捕えて海島に放したという内容）、更に、常憲院殿御實紀（徳川綱吉）元禄五年（1692）十月三日の狂犬（人を傷つける場合は繋ぐことを指示）³⁵といった記録があり、狂犬という記載から狂犬病発症犬と誤解もされる場合があるが、内容から攻撃的で吠えたり咬み付くイヌだと思われる。

永観二年（984）献上の医心方³⁶では、「（諸）病源候論」（隋の巢元方が編纂）「獠犬嚙候」をそのまま引用して、狂犬病発症犬を獠犬と呼び、咬まれた場合に100日を過ぎれば安心と、ヒトの狂犬病を示す用語はないがリスクが記述されている。また、正徳三年（1713）の「和漢三才図会」³⁷では、風狗と獠犬は同義であり、「保嬰全書」（探し得なかったが「保嬰撮要」か？との記述あり³⁷）獠犬の症状を引用しているが、ヒトについての記載はない。享保十七年（1732）までは、国内ではヒトの狂犬病の知識は乏しかった、あるいはなかったものと思われる。

「勝山記」（「妙法寺記」）の記述が狂犬病との確証はないが、特に咬み付き斃れたというイヌの様子は狂犬病の症状を疑わせ、今後の研究を待ちたいと思う。

7. 流行病への対応法

施餓鬼は天災や飢饉などで不慮の死を遂げた人々のため、元々は随時に行われた法会³⁸で、「小年代記」の4回の流行性疾患は、施餓鬼実施の理由として記録されたものである。「勝山記」には享禄三年（1530）「七月八月ノ両月諸国ノ諸神ヲ

カシマエ人々送り申事無限 人々ノナヤム事数ヲシラス、タイカイ死ルナリ」と永正八年(1511)「浮世ニコウヒハヤリ人民死事無限、然間彼ノコウヒノ鳥ヲツクリ送候、一日ヤミ候テ頓死至候」と記録されている。鹿島送りは、鹿島信仰の一つの形として、災厄をこめた人形を作って村中を練り歩き、浜辺や川辺で流して鹿島の地へ送り込むというものであり³⁹⁾、鳥送りのコウヒをもたらし悪霊や穢れをこめた鳥を作って川に流したということから、鹿島送りと同様の人形送りであろう。これらがいわば流行病対策であったものと思われる。

8. その他

4年代記では明応七年(1498)の地震の記録が唯一共通しており、自然災害の記録、月食、星食、彗星等の天体観測記録があり、これらに付いても興味が尽きない。

文献

- 記録類. 山梨県史資料編6中世3上県内記録. 山梨: 山梨県; 2001. p.3-21.
- 末柄豊. 『勝山記』あるいは『妙法寺記』の成立. 山梨県史研究1996; 3号: p.1-19.
- 勝山記. 山梨県史資料編6中世3上県内記録. 山梨: 山梨県; 2001. p.195-245.
- 勝山記. 勝山村史別冊. 山梨: 勝山村史編さん委員会; 1992. p.1-153.
- 勝山村御室浅間神社所蔵『勝山記』. 妙法寺記. 山梨: 富士吉田市史編さん室; 1991. p.87-149.
- 流石奉. 勝山記. 勝山記と原本の考証. 東京: 国書刊行会; 1980. p.11-164.
- 勝山記・妙法寺記. 都留市史資料編古代・中世・近世I. 山梨: 都留市; 1992. p.143-188.
- 文政活刻『妙法寺記』. 妙法寺記. 山梨: 富士吉田市史編さん室; 1991. p.1-49.
- 山梨県史資料編6中世3上県内記録. 山梨: 山梨県; 2001. p.102-131.
- 塩山向嶽寺禪菴小年代記. 磯貝正義・服部治則編修. 塩山向嶽寺禪菴小年代記. 東京: 分林堂書店; 1975. p.1-118.
- 王代記. 山梨県史資料編6中世3上県内記録. 山梨: 山梨県; 2001. p.132-194.
- 王代記. 磯貝正義・服部治則編修. 王代記. 東京: 分林堂書店; 1975. p.1-75.
- 甲陽日記(高白齋記). 山梨県史資料編6中世3上県内記録. 山梨: 山梨県; 2001. p.83-101.
- 高白齋記(甲陽日記). 清水茂夫・服部治則校注. 武田史料集. 東京: 新人物往来社; 1967. p.6-109.
- 富士川游. 疫病. 日本醫學史. 東京: 形成社; 1972. p.169-177.
- 富士川游. 疫病・痘瘡・水痘・麻疹・風疹. 日本疫病史. 東京: 平凡社; 1960. p.3-212.
- 山内一也. はしかの脅威と驚異. 東京: 岩波書店; 2017. p.2.
- 南啓治. 小山田与清. 大百科事典2. 東京: 平凡社; 1984. p.11-46.
- 流石奉. 勝山記原本の考証. 勝山記と原本の考証. 東京: 国書刊行会; 1980. p.173-295.
- 吉岡正和. 現代語訳「断毒論下」. 橋本伯壽と「断毒論」—早く登場しすぎた疫学者. 山梨: 吉岡日新堂; 2019. p.128-187.
- 吉岡正和. 現代語訳「翻訳断毒論」. 橋本伯壽と「断毒論」—早く登場しすぎた疫学者. 山梨: 吉岡日新堂; 2019. p.188-230.
- 吉岡正和. 現代語訳「断毒論上」. 橋本伯壽と「断毒論」—早く登場しすぎた疫学者. 山梨: 吉岡日新堂; 2019. p.85-127.
- 宝暦九年村差出明細長写 卯六月 都留郡下吉田村. 山梨: 富士吉田市史編さん室; 1988. p.128-134.
- 富士川游. 黴毒ノ発現. 小川鼎三校訂. 日本医学史紅綱要1. 東京: 平凡社; 1986. p.87-89.
- 土肥慶蔵. 東亜ニ於ケル黴毒ノ發生・東亜ニ於ケル黴毒病理觀ノ變遷. 世界黴毒史. 東京: 形成社; 1973. p.47-161.
- 花溪大機. 跋. 断毒論地. 山梨県立博物館蔵.
- 辻家日記. 山梨県史資料編10近世3. 山梨: 山梨県; 2002. p.591.
- 狂犬病. 重松逸造・小張一峰・今川八東編著. 伝染病予防必携. 東京: 日本公衆衛生協会; 1989. p.51-53.
- 狂犬病. 沖中重雄編著. 内科書中巻. 東京: 南山堂; 1973. p.64-69.
- 谷口研語. 狂犬病は犬と人の共通の敵. 犬の日本人間とともに歩んだ一万年の物語. 東京: 吉川弘文館; 2012. p.155-169.
- 唐仁原景昭. わが国における犬の狂犬病の流行と防疫の歴史. 日本獣医史学雑誌2002; 39号: 14-30.
- 律令. 井上光貞他校注. 日本思想大系3. 東京: 岩波書店; 1976. p.480.
- 政事要略. 黒板勝美編輯. 新訂増補國史大系第二十八巻. 東京: 吉川弘文館; 1964. p.614.
- 義堂周信. 空華老師日用工夫略集巻二. 續史籍集覽第三冊. 東京: 近藤出版部; 1930. p.33.
- 常憲院殿御實紀巻廿六. 黒板勝美編輯. 國史大系第四十三巻徳川實紀第六篇. 東京: 吉川弘文館; 1975. p.152-153.

- 36) 槇佐知子訳・注解. 治癒犬嚙人方第廿四. 医心方
卷十七皮膚病篇. 東京：筑摩書房；2007. p.213–228.
- 37) 寺島良安編. 狗. 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳
訳注. 和漢三才図会 6. 東京：平凡社；1987. p.7–13.
- 38) 伊藤唯真. 施餓鬼. 大百科事典 8. 東京：平凡社；
1985. p.478.
- 39) 宮田登. 鹿島信仰. 大百科事典 3. 東京：平凡社；
1984. p.266.

History of Epidemics in Kai Province
during the Sengoku Period:
A Study of 111 Years Indicated in 4 Annals Comprised of
Katsuyamaki (勝山記), *Enzan Kōgakuzenanshonendaiki*
(塩山向嶽禅庵小年代記), *Odaiki* (王代記),
and *Koyonikki* (甲陽日記)

Masakazu YOSHIOKA

Yoshioka Iin

There are 4 annals in the Kai Province. When studying epidemic diseases, I found 25 years' worth of records indicating 30 cases of epidemics with massive amounts of victims during the 111 years (especially during the Sengoku Period). There were 5 cases of smallpox epidemic and 1 case of an epidemic brought about by a combination of smallpox and measles. It has been said that the Kanji lettering for measles “麻疹” was first used in 1513, but this is incorrect, as this has been found to have been rewritten at a later date. In 1513, there is a record of a disease that seems to have been syphilis, and this has been thought of as the second oldest recorded case of syphilis in Japan. In addition, although its validity is in question, there seems to be a record of dogs and foxes infected with rabies in 1476 and 1503.

Key words: History of Epidemics in Kai Province, Sengoku Period, Measles, Syphilis, Rabies